黒い蝶

フィオネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い蝶

【Ｎコード】
Ｎ８５６８Ｌ

【作者名】
フィオネ

【あらすじ】
主人公高橋麗奈は親友である美香や幼なじみの勇気、クラブの仲間達などと楽しい学校生活を送って約１年。
今日も麗奈は何事もなく学校生活を送る…はずだったが、とんでもない事故が起こって…。

～プロローグ～（前書き）

こんにちは、フィオネです。
小説を書くのは今回が初めてです。
誤字などおかしい表現があったらご指摘よろしくお願いします。
感想などもいただけると嬉しいです。

～プロローグ～

「いいかい。蝶ってのはな、いいことがあったり、幸せを感じたときは、羽の色がいつもよりキレイに見えるんだぞ。逆に悪いことがあったり、不幸を感じたときは羽の色がいつもよりキタナく見えるんだぞ。」
義理の父とも呼べる遭助おじさんが少女を公園の花畑に初めて連れてきたとき、ひらひらと飛んできた蝶を見て言った言葉だ。
今聞けばそんなの冗談だっていうぐらい分かる。
「蝶が気持ちで色を変えるわけないじゃん。」と思うだろう。
しかし、その当時まだ幼かった少女はその言葉を素直に受け取り、信じきってしまっていた。
それから少女は、自分の気持ちを蝶の状態、羽の色で無意識に表すようになった。
それはやがて、癖ともいえるものとなった。

始業式の日…
今高橋麗奈は、あともう少しで3学期をむかえることになる。
窓からは紅葉の美しい紅葉が完全に散ってしまった木々が見えた。
クラスメートには、あと少しで3年生だの、最高学年だのと心を踊らせている人もいれば、3年生になるのを嫌がっている人もいた。
少女は無論、後者の方だった。
3年生になる―それはつまり、先輩がいなくなってしまうことを表していた。
「おはよ―っ！！麗奈！！」
「おはよう。麗奈。」
などと、教室に入ったとき友達が麗奈を見るなりかけよってきた。
「おはよう。瞳、絵理。」
「どうしたの？今日は何か元気なさそう。体の調子でも悪いの？」

「そうだよ～いつもはもっと元気じゃん。」
「え～、そんなことないよ。」と麗奈は無理やり笑ってみせた。
「そっかな～」
「本当だってばぁ～。大丈夫だよ。ただ秋休み明けだから、体がなまっちゃってさ～」
「まぁ、確かに休み明けってなまるよねぇ。でも3学期で最後だし頑張らなきゃ！あっ、そうだ、あとでみんなでジュース買おうよ。」
「あっ、それ賛成！」
「いいよ、ちょうど喉が乾いちゃっててさ。」
二人となにげない話して、少し気分が晴れた。それに、瞳のポジティブ思考は相変わらずスゴイ。
(元気なさそう…か。確かにあまりいい気分じゃないな。）と思いながらフッと教室の隅の方を見た。１つの机だけ、鞄が置かれていなかった。彼女はまだ来ていない。
(美香…)
麗奈は心の中でつぶやいた。
「よっ、なんだ、元気ねーのか？もしかして3年生になるのイヤだなぁなんて思ってるとか？」
「！っ、そっそんなわけないでしょ！」と、とっさに答えた。
「何で、勇気が来るのよ！」
「何でって、お前をからかいに来ただけだよっ。麗奈はからかい甲斐があるからな。…別に、お前を心配してるとかそんなんじゃねぇぞっ！」別に聞いてもいないのに最後の所で顔が少し赤くなっていた。おかしくなって今度はこっちから攻めた。
「そんなこと言って、顔赤いよ。大丈夫～？熱でもあんのかしらねぇ。体温はかってあげようか？」
「いっ、いいよ！余計なお世話だっ。だいたいな、俺は風邪を引いたことないんだぜ。」
「別に遠慮しなくてもいいんだよぉ。…何よ、せっかくの女の子の気づかいをさ。」

「あぁもう！いいですよ—だっ。俺時矢のとこ行くから！」彼はめずらしく自分から引いた。思い通りの展開にならず、ヤケになっている。

「こういうとき、安藤がいればなぁ、お前の口を防ぐ事ができるのによっ！」

それから、「あっ」と勇気がつぶやく。

そして、

「…安藤のやつ、まだ来ないんだな。」と言った。

彼も彼なりに彼女を心配しているのだ。

「うん…。」麗奈は静かにうなずいた。

あの時のことは忘れようにも忘れられない。

ある日一匹の蝶が、ある花畑に行った。

そこは蝶にとって楽園…のはずだった。

登場人物

高橋麗奈
運動神経抜群。
陸上部所属。
国語が苦手。

青山勇気
麗奈の幼なじみ。
麗奈とよく一緒に国語の補習を受けている。
陸上部所属。

安藤美香
麗奈の親友。
陸上部のマネージャー。
麗奈と違って成績がいい。

時矢武人
何でも真面目に取り組んでいる。
陸上部員で実力もそこそこ。
頭もいい方。

夕凪先輩
超クールで何でもできる。

瀬戸先輩
クールで穏やか。

鈴川理沙

陸上部の後輩。
いつも部活に遅れてくる。
また、陸上部一のドジ。

ロール先輩
本名は縦巻百合花。
陸上部のムードメーカー。
麗奈とよくはりあっている。

中原梓
麗奈にとっては謎の人物。
実は夕凪と同じクラス。

雪先生
国語の先生。麗奈と青山の補習の面倒をみている。優しくて美人なので生徒から人気がある。

瞳と絵理
麗奈の友人。

第1章　日常～エピソード1～

「よっしゃー！！やっと部活の時間だ～！」元気よく言いながら急いで体操着に着替える。
そこへ、誰かが近づいてくる気配を感じた。
振り返ると、安藤美香が立っていた。
「ごめん、麗奈。今週掃除当番なの。先行ってて。」少しだけ申し訳なさそうに言う。
「あ、うん。わかった。終わったら早く来てね！」
「ありがとう！」そしてエプロンをそそくさと装着すると、急いで教室から出て行った。
安藤美香は、陸上部で初めて仲良くなった女の子だ。
彼女は極度の運動音痴なため、それを克服するために陸上部に入ったという。
しかし案の定一番足が遅かったので、中1の3学期あたりからマネージャーをつとめている。
彼女の笑顔には、どうやら癒しの効果があり、よく落ち込んだ時は何度もその笑顔に救われてきた。
今となっては一番仲が良い友達、すなわち親友と言ってもいいぐらいだ。
陸上部の活動場所―サブグラウンド（メイングラウンドとの2種類があり、メインの方は野球部が使っている。）に着いた時、いたのは時矢武人だけだった。
時矢は勇気とよくいるやつで、陸上部員だ。
「いつも早いわよね、あんた。」静けさをふっ切るように口を開いた。
「あぁ、走ってきてるんだ。…前にも言ったはずなんだがな。」
「えっ、あれっそうだっけ？」
「高橋って記憶力がないのか？」

「そっそんな事ない！ただあたしにとって印象がなかっただけよ！」
「…ふーん。」
時矢武人は同じく陸上部員だ。
本当にこの人はくそ真面目で、この人がふざけた所なんて見たことがない。
見た所勇気を今の目標にしているらしく、いずれ彼を抜いてやるというように、日々走れる所は走ったりする努力家でもある。
彼は学年トップに入る頭脳を持っているが、これも才能ではなく、努力してという感じなのである。
麗奈にとっては、ちょっと付き合いにくいタイプではあるが、勇気とは仲がいい。
（あーあ、会話が終わっちゃった。誰か来てくれないかなぁ。）と思いながら二人で、いろいろ部活の準備をしていると、４人の後輩、赤城さん、星野さん、川崎さん、宮坂さん、がバタバタ走ってやってきた。
「先輩、こんにちは！」４人がそろえて言った。
「こんにちは。じゃあ、早速ハードルの準備お願いね。」
「はい！」
次には、麗奈が尊敬している先輩の一人、瀬戸先輩がやってきた。
尊敬しているからか、麗奈にはとても優雅に見えた。
「こんにちは、瀬戸先輩。」麗奈が挨拶をした。その声で、他の部員も気づいて挨拶をした。
「こんにちは、今日もちゃんとやってるな。」瀬戸先輩が少し感心して言った。
瀬戸先輩はクールで穏やかな副部長だ。
「もうすぐ準備も整いそうだし、手が空いてる人は体操して練習を始めよう。」
「はい！！」今度はいっせいに皆返事をした。
そして、ついにあのお方がやってきた。
ゆっくり近づいてくる。

麗奈は軽く赤面した。
「こっこっこんにちは、夕凪先輩！」
「…あぁ。」
すーと通り過ぎてしまった。
夕凪先輩は挨拶してもいつも素っ気ない返事がくるだけとわかっているし、しなくても後で何も言ってこないことはわかっているのに、麗奈は挨拶しないと気が済まなかった。
彼は陸上部の部長をつとめていて、部内でも一番足が速い事で有名だ。
その上ザ・クールというような感じで、瀬戸先輩とは違い穏やかの「お」の字もない。
麗奈は、そんな彼のことも尊敬しており、また、密かに好きになっていた。
初めて会った時はそうでもなかったが、だんだん彼の走っている姿を見て、いいなぁ、素敵だなぁと思うようになったのだ。
また、足音が聞こえてきた。今度は２人だ。
掃除を終えてきた安藤美香と、青山勇気だった。
「先輩、こんにちは。」美香が丁寧に挨拶した。手にはマネージャーノートが握られていた。
「こんにちは！先輩！」一方の勇気は元気よく挨拶した。
青山勇気は麗奈の幼なじみだ。
幼稚園、小学校、そして中学校と、同じ所に通っている。
遭助おじさんによれば、生まれた病院も同じらしい。
それを初めて知った時、コイツとはどんだけ縁があるんだ！？と麗奈は思った。
ちなみに家もそう遠くない。
よく彼は麗奈をからかったりする事がある。
でも決して仲が悪い訳ではない。
また、同じクラスで美香と出席番号がすごく近いため、掃除当番の班が一緒である。

そのため、掃除がある週は一緒に来る。
美香は麗奈をみつけ、駆け寄ってきた。
「麗奈！やっと掃除終わったよ！今日も頑張ってね！応援してるから。」
「ありがと！美香。よぉ～し、今日も走りまくるぞぉ～！！」
「おいおい、お前も一応女なんだからさ、もうちょっとおしとやかにできないのかよ。」
勇気が少々あきれっぽく言う。
「ちょっと～！一応って何よ、一応って！失礼な！」
「まっ、安藤を見習えよな。」と言って、立ち去った。
「勇気のやつぅ～！よぉ～し、今日の部活でぶっ潰す！！」
「まっまぁ、頑張って、アハハ」と美香は苦笑いするしかなかった。
その後、ドタドタと誰かが走ってきた。
麗奈はそれを見るなりニヤリとした。
「ハァ、ハァ、あ～ギリギリ間に合ったぁ～。」縦巻先輩だった。
「こんにちは、ロール先輩♪」麗奈はニッコリ笑って近づいた。
「な～にが『こんにちは、ロール先輩♪』よ！！やっぱりあたしのことナメてんでしょ～！来る途中あんたがニヤケてるの、あたしこの目でちゃんと見たんだからね！あと、だれがロール先輩って呼ぶのを許したのかしら！許可した覚えないんだけど！ちょっと高橋麗奈きいてんの…ってアレ？！」
縦巻…いや、ロール先輩は周りを見回した。
いつのまにかみんながいなくなっている。
「ってあ～！！もうあっちで準備運動始めてるし！」
待ってよ～というような感じでみんなの元へドタドタと走っていった。
ロール先輩は中3だが、マネージャーを除いて足の速さがビリという悲しい所がある。
勉強も理科を除けばあまり得意ではない。
そんな彼女の唯一自慢できることといえば、すざまじく視力が良い

ことだ。
彼女の視力は両目共に2．5。
校内で一番視力がいい。
ちなみに、ロール先輩というあだ名は麗奈が最初におもいついて呼んでいる。
時々他の部員にも呼ばれているが、その都度叱ってくる。
でもそれがまた面白いから麗奈はそう呼びたくなってしまうのだ。
ちなみに本名は縦巻百合花。
準備運動が終わり、今日の最初のメニュー「サブグラウンド10周」をこれからやろうとしていた時、美香が言った。
「あれ？そういえばまた鈴川さんがいな…」美香が言い終わらないうちに、
「すっすみませんっ！おっ遅れましたぁ〜！！」というちょっとかわいらしい声が遠くからきこえてきた。
「ハァ、ハァ…」荒い息づかいで下をみている。
「いつも遅いぞ、鈴川。」夕凪先輩が静かに、でもどこか鋭い一言を鈴川さんにぶつけた。
「はっはい！本当にすみませんっ！」ビクッとして立ち止まった。
「…ペナルティーとして腹筋、背筋、腕立て全て30回！」
「はいっ！わかりましたっ！」と言って早速始めようとする。
美香が足を押さえてあげた。
「どうしてまた遅れたの？」
「あっあの……、今日は……、トイレがいつも…以上に…長く…なって…しまい…まして…。」腹筋しながらなので、ところどころきれながらも、それを伝えた。
「大丈夫？お腹の具合が悪いの？」
「そういう…わけ…ではない…ですけど…。」
「そっそうなんだ。でもマネージャーは本当は常に遅れちゃいけないのよ。1ヶ月に5回くらいそうじゃない。だからペナルティーを受けるようになっちゃうのよ。マネージャーだからマシな方だけど、

そうでなかったら、もっとツラいのをやんなきゃいけなくなるわよ。だから気をつけて。
「はい…気をつけ…ます。」ちょうどそこで腹筋が終わった所だった。
鈴川理沙は中1で、美香と同じくマネージャーになった子だ。1ヶ月に5回くらい部活に遅れてしまうのでペナルティーを受けている。
遅れる理由は2パターンあって、1つは委員会の仕事で遅れた、掃除をしていて遅れたなどのまともな理由な時とトイレが長くなって遅れた、着替えるのに時間がかかって遅れたなどのくだらない理由の時がある。
多いのは後者の方である。
しかし、追試で遅れたり、補習にひっかかって出られなかったりすることはないため、勉強はそこそこできるらしい。
鈴川さんが来たことで、陸上部員はこれで全員そろった。
「今日は、確か５００m走のタイムを競うんだっけな。」勇気が思いだして言った。
「えっ、本当!?よっしゃ～、やってやるわよ～!!」麗奈はハリキって言った。
「お前そんな熱血キャラだったけ?」
「そうよ!女でも熱血はあるのよ!男の方がもしかしたらないのかもねぇ～。」と少しからかってみる。
「はぁ!?お前男をナメてやがるな!みてろよ!今日こそは男の意地ってもんを見せてやるからな!!」
「ふっ、それは楽しみね。」といって、2人とも互いに目と目の間に電気が走っている。
そして、今も麗奈達は走っている。
「サブグラウンド１０周」のちょっと5周あたりか。
時にはつらく、時には厳しいが、麗奈はこの陸上部が大好きだ。
他の運動部と比べると人数が少ないが、皆仲が良くて楽しい部活。

麗奈はそう思っていた。
実際にそれは当たっていた。
…はず。
はずなのに、まさかこんなことが起きてしまうなんて、この時の麗奈には想像がつくはずもなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8568l/

黒い蝶

2010年10月15日23時06分発行